

「家がいいね」 第133号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2015. 6. 1

花火の命、いのちは花火？

せんこう花火がほしいんです
海へ行こうと思います
誰かせんこう花火をください
ひとりぼっちの私に

風が吹いていました
ひとり歩いていました
死に忘れたトンボが一匹
石ころにつまづきました

なんでもないので あー泣きました

吉田拓郎 (1972年)

「たくろう」という同じ名前前の彼は4歳年長の人
彼が歌った時、私は22歳。メロディも詞もその
まま心に沁み込みました。今でも忘れられませんが
線香花火には、牡丹↓松葉↓柳↓散り菊と起承
転結があるのだそうです。そうとつまんて最後
まで見ようと持っても、ポトツと落ちて哀しくな
ることも度々です。風も吹いていないのに。

線香花火は紙縊りに火の塊を繋げながら次々と
彩りを変えてゆきます。人の生きる姿に似ていま
せんか？ 長くても短くても一生懸命。消えた後
でも、残る闇さえも愛おしく感じられませんか？

みえ生と死を考える市民の会 定期講演会
6月21日(日) 13時~15時

津市 三重県総合文化センター
アルフォンス・デーケン先生

(哲学者・死生学提唱者)



「輝いて生きるために」

ユーマアのすすめ

人には避けられない死があり、自分の人生は自分しか
生きられない。しかも一回限りの人生です。ユーマアを
持って、輝いて生きるに値する時間が待っています。

今まで「終末期」と呼んで来た時期を『人生の
最終段階』と考え直そうと、試みが始まりました。
ユーマアとは、「にもかかわらず微笑む」こと。
自らの人生は、そのように締め括りたいですね。



認知症は、自分でなくなるから、怖いのか？

123号で「認知症でも怖くない」とケアを行
う側からの、ユマニチュードという取り組みでの
安心をお伝えしました。しかし、自分自身が癌に
なるよりも認知症になるのが怖い気持ちの中には
今の自分が保てなくなるからという不安があるよ
うです。この傾向は、属する文化や社会によつて
も違つと気付かれています。欧米では個人の能力
を主に考えますので、認知症になれば無力な自分
しか残らないと恐れます。一方で、沖縄やアジア
諸国では、認知症があつても敬愛する人の輪は変
わらずに対応するため穏やかな症状で済みます。
欧米や今の都会では、病気の面を強調し対処する
ため、さらに不安な思いが強まるのでしょうか。

大井玄さんは、80歳の在宅医。10歳で戦後
を迎え、ハーバード大学院を卒業しアメリカ社会
の光と影を知っている方です。日本の在宅訪問の
経験では、日米二つの文化圏で軋む現代社会が、
映し出されると言われますが、私も共感します。

前半の記述は、大井さんの
『痴呆老人』は何を見ている
か(新潮新書)を参考にさせ
てもらいました。大井さんの、
『病から詩が生まれる』(朝日
選書)も、ぜひお読み下さい。



今月も訪問診療への同行をお願いします

6月は、研修医に加え看護
学生がクリニックに来て同行
訪問します。未来の在宅医や
訪問看護師を、ぜひ患者さ
ん・ご家族が共に育ててくだ
さい。よろしく願います。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>